

- 1 はじめに
- 17 **「アートの日」について**
- 18 先生方と保護者へのメッセージ
「アートの日」は人を育てる
—すべては美術館との出会いつながりから—— 富林純子
- 21 「アートの日」とは？

- 2
- 23 **鑑賞**
—美術館で、就学前施設で
- 24 案内の流れ
- 28 鑑賞プログラム
- レシピ1 お気に入りを探そう
- レシピ2 賞をプレゼント、カードあそび
- レシピ3 ヤッピーネとお話づくり
- レシピ4 まねっこあそび
- 実践事例 子どもたちとアートとの出会い—— 太田浩資
- 実践事例 美術館って身近なもの—— 井上憲哉
- 38 **子どもたちの鑑賞のようすから**
- 44 **解説** 就学前の子どもたちと鑑賞を楽しむ—— 森 芳功



3

51 鑑賞+造形

—美術館で、就学前施設で

52 鑑賞+造形プログラム

レシピ1 イヴ・クラインの作品鑑賞とボディプリント

実践事例 「これでもいい?」から

「みてみてーやってみたよ」へ—— 中元美佳

実践事例 「人」をテーマに

—運動会のクラス旗をつくろう—— 森本裕子

レシピ2 絵と絵をつなげてお話をつくろう

レシピ3 マティスの作品鑑賞でつくる絵

実践事例 マティスってみる—— 福原朋美

レシピ4 墨であそぼう

実践事例 シュロのほうきで描く墨絵—— 山崎幸子

レシピ5 日本画の絵の具でお絵かき

レシピ6 透明水彩で色あそび

73 発展的な事例

「人」をテーマに 夏まつりに「わくわくタウン」をつくろう—— 森本裕子

75 解説 子どもの成長や

関心とつながる「鑑賞+造形」の活動—— 森 芳功



4

79 造形

—美術館で、就学前施設で

80 造形プログラム

レシピ1 シュレッター粘土をつくろう

実践事例 「アートの日」に出会って(シュレッター粘土)—— 筒井明美

実践事例 アートの可能性は無限大

—シュレッター粘土が結び付けたものとは—— 梅岡慶子、田中美咲

レシピ2 シャボン玉アート

92 発展的な事例 素材あそびってたのしい!! —— 井上佳子

99 発展的な事例 心と心が合わさったモザイクアート

(幼稚園・保育所共同作品)—— 近藤恵子

100 造形プログラム 自然・環境・場所を生かした表現活動

実践事例 石ころアート

実践事例 魔法の水絵の具—大地(園庭)はキャンバス—— 岸上 学

106 解説 素材研究からひろがる「造形」の活動—— 亀井幸子



5

109 これから取り組む先生へ

110 「アートの日」年間計画

レシピ 年間計画の立て方

年間計画表の例

2018年「アートの日」日記—— 北濱道子

「アートの日」の設定と年間計画

—これから取り組む先生へ—— 船本孝子

122 「アートの日」勉強会・研修会

「アートの日」の体験

—保育士、保育教諭会研修より—— 寺西恵美子



6

129 先生方の活動レポート

130 「アートの日」

—美術館とのすてきな出会いそして絆—— 中野伊久子

132 「アートの日」を通してのつながり—— 宇田 泰

136 「アートの日」を経験して

—美術館イベントサポーターとして—— 細川和子

138 一人一人の表現を大切にすること

—褒められた記憶が蘇った瞬間—— 和渕幸枝

140 Mちゃんの開花(成長)していく姿って最高!!—— 岸上 学

145 共に育ち合う仲間づくりをめざして

—「アートの日」の取り組みから—— 好岡文恵

149 アートの楽しさ届けたい!

—心動く原体験—— 田中 育美

152 三人の心の成長

—「アートの日」の活動を通して—— 和渕幸枝

154 子どもを通して気付いた大切なこと

—保護者の立場から—— 岸上佐和子

156 近代美術館の歌ができるまで—— 久米絵里子

159 「目から鱗」のアート体験—— 佐々木 晃

161 地域の美術館と子どもたち—— 東浦博史



7

163 論考・報告

- 164 子供の絵を見ること、
子供が絵を見ること——松岡宏明

- 170 音楽と美術と子どもたち
—領域「表現」の教科横断的な活動と
その基盤としての「身体」——高木 夏奈子

- 176 「アートの日」と
ユニバーサル美術館事業の取り組みから——亀井幸子

- 182 就学前の子どもたちの成長と美術鑑賞——森 芳功



8

195 資料

- 196 徳島県立近代美術館の
就学前施設との連携事業
- 200 減免申請書、出前授業依頼書、
講師派遣依頼書の様式
- 201 就学前の子どもたちに
アートの楽しさを届けるプロジェクト



4 造形

—美術館で、就学前施設で

「アートの日」の取り組みでは、「鑑賞」や「鑑賞＋造形」だけでなく、「造形」活動にも取り組んできました。ここでは、鑑賞とセットになっていない独立した表現活動を、「造形」のプログラムとしてご紹介します。

子どもたちは様々な作品を鑑賞し、それぞれによさや面白さを見出す力を培っています。その力が造形活動の場面でも生かされ、一人一人の表現が尊重される環境のなかで、子どもたちは自由にのびのびと自分のやってみたいことに熱中することができるでしょう。

造形というと粘土で動物を作ったり画用紙に絵を描いたりすることを思い浮かべる人が多いと思いますが、子どもたちの興味・関心は、形あるものを作ったり絵の具で紙に何か描くことだけに留まりません。この章では、子どもたちの身近にある素材や遊びと結びつけた造形活動をご紹介します。





シュレッター粘土をつくろう

このレシピでは、シュレッターした紙という身近な素材を使って、作品づくりの材料をみんなで協力して楽しみながらつくる活動をご紹介します。

シュレッターした紙は、細断されているので紙粘土を作るのに都合がよく、資源の有効活用になるうえ、市販の紙粘土よりも安価で大量に作ることができます。さらにもう少し視点を変えてみると、この紙ゴミは、ただの廃棄物ではなく、特別な素材にも見えてきます。紙を捨てるのになぜ、わざわざ細断されているのか?ということを考えてみましょう。ただの「ごみ」だったものが、なにかワクワクするような「秘密が書かれた紙」に見えてきませんか。子どもたちには、ワクワクする「素材」との出会いを大切に、作品制作の材料を自分たちの手で作り出す楽しさを体験してほしいと思います。

-
- 年齢 3～5歳児
 - 時間 30～45分ぐらい
 - 準備物 シュレッターした紙、たらいやバケツ、水、洗濯糊、
ビニール袋、使い捨て手袋、絵の具など
- 作り方は、74ページを参照してください。
-

シュレッターした紙であそぶ

グループに分かれて、活動します。

大きなたらいやバケツに入れて素材の

感じを十分味わいます。「何に見える?」

「触った感じは?どんな音がする?」



水を入れる

シュレッターした紙に水を入れて

よく混ぜます。

水を含んできたら紙をちぎって小さくします。



1

〔レシピ〕シュレッター粘土をつくろう

「触った感じは?どんな音がする?」

水を入れる前に紙で遊んだときと水を含んだときの違いを楽しめます。

のりを入れる

水を含んで柔らかくなった紙を絞って
おにぎり大の塊をつくります。

バケツの水を捨てて、絞った紙とのり
(でんぷんのりや洗濯用の水のり)を
入れて混ぜます。



絵の具を入れる

1グループに1色のシュレッター粘土を作
ります。赤、青、黄、緑があれば十分だ
と思いますが、作品づくりに使う目的に合
わせて白や黒があってもいいと思います。
グループごとに絵の具を入れてよく混ぜた
ら出来上がりです。



シュレッター粘土であそぶ

制作に必要な分を色ごとにビニール袋に
入れて保管しておきます。残った分は、他
のグループと分け合って、全色がそろった
ら、シュレッター粘土で遊びましょう。お団
子を作ってもいいし、思い浮かんだものを
作ってもいいでしょう。好きな色を混ぜて
みてもいいでしょう。子どもたちのやっ
てみたいことを自由にやらせてあげましょ
う。もし、気に入ったものができたら、
乾燥させて作品として残してもいいでしょ
う。



1

[レシピ]シュレッター粘土をつくろう

□発展

シュレッター粘土で作品づくり

シュレッター粘土と呼んでいますが水分が多く粘土のように立体の形をつくるのは難しいでしょう。スチレンボード(発泡スチロール材を紙でサンドイッチしたもの)や発泡スチロールのトレイなどを台にして、その上にシュレッター粘土を乗せて乾燥させると、モコモコの半立体的な絵ができます。シュレッター粘土の性質が分かってくるといろいろな作品に応用できるので子どもたちと一緒に触って遊んでみることをお勧めします。

やってみようと思う先生へ

- シュレッターした紙を集めるときに、ホッチキスの針が混入していないか十分に確かめます。
- シュレッター粘土はできるだけ早く使うことが原則ですが、色ごとにビニールの袋に入れて涼しいところに置いておくと数日間保管できると思います。
- 余った材料は、小さく丸めたり、薄く延ばして板状にしたり、細長い棒状にしたりして乾燥させておくことで新しい「素材」となります。
- あと片付けのとき、紙が入っていたバケツや手を洗面台でそのまま洗い流してしまうと排水パイプが詰まってしまう大変なことになります。排水口のところにネットを張ったり、大きなざるの上で洗ったりするなど工夫をしてください。



「アートの日」に出会って (シュレッダー粘土)

筒井明美 (徳島県立近代美術館アートイベントサポーター、元徳島市立保育所長)

現職の時、美術館の先生との出会い(2014年6月)に恵まれ、職員研修に講師に来ていただいたり、また保育所の子どもたちと一緒に職員も様々なアートの活動を教えていただいたりしながら楽しみました。

様々な活動の中でも、シュレッダー粘土は何度となくよく遊び、また作品づくりもしました。私自身が以前、子どもたちと新聞紙やトイレトペーパーなどを使って紙粘土作りをしたことがあったので、シュレッダーした紙の再利用ができることと、紙を細かくする手間がいらないことになり、なるほどと「目から鱗」でした。

保育士が材料を準備していると、子どもたちが「なにをするん?」と興味津々で集まってきました。たらいにシュレッダーした紙と水を入れると、始めは「パサパサやな」そのうち「ぼそぼそするわ～」と子どもたちは手で混ぜた感触を言葉で表現していました。次に洗濯糊を入れると初めて見る洗濯糊に「それなに」「エーそんなのりいれるん」「て、よごれるんいや～」「きもちわるそ～」とすぐには触れなかった子もいました。保育士が絵の具を入れ色付け始めると「おもしろそ～」「やってみたい」「ぼくもさせて」「わたしにもかわって」とグニュグニュの手触り楽しみながらシュレッダー粘土を作りました。

最初の頃は、粘土を粘土板の上で広げたり、積み重ねたり、2色の粘土を混ぜて色の変化を楽しみました。その後「これな、やまよ」「ぼくのは、わに」「わたしは、ハンバーグをつくったよ」と見立て遊びを始めました。面白い物ができると乾かして遊びに使ったり、オブジェとして飾ったりしました。

シュレッダーした紙が集まるたびに、色を変えてシュレッダー粘土を作り、粘土と言えばシュレッダー粘土というくらい、子どもたちの間に浸透していきました。

地域の作品展(コミセン祭り)に子どもたちと保護者の共同作品を飾ってみたいということで、保育参観日に美術館の先生にアートのお話とシュレッダー粘土遊びの指導をしていただきました。保護者の方は、「へーこれいいね、覚えといて小学校のお兄ちゃんの夏休みの宿題に教えてあげよう」「こっちには〇〇色ができましたよ」「黄色い粘土欲しいけど、どこのグループにありますか?」「T君のお父さん、面白いん作ろう」と、皆が積極的に参加して、親子で時間のたつのも忘れるほど楽しみました。地域の作品展には、5歳児と保育士で「モザイクの共同制作」としてまとめ、展示しました。地域の方からも「小さな一つ一つもこんなに集まると迫力あるね」と声を掛けていただきました。

その後も、シュレッダー粘土でおひな様などをつくりました。5歳児はお茶会に来ていただいた地域の方やお家の人に、飾り磁石のプレゼントを作りました。翌年は、4歳児がクリスマスツリーをつくり楽しみました。

シュレッダー粘土は子どもたちの自由な発想や表現を広げていくことができる素敵な素材です。様々な活動に利用でき、また安価で、素材から自分で作る体験ができる、赤色黄色・青色・白色の4色を作ると自分で混色を楽しめる等々。小さい子どもも、大人も一緒にいっぱい楽しむことができるシュレッダー粘土を活用して、ぜひアートを楽しんでください。

シュレッター粘土の作り方（私の体験から）

準備物

- 書類などをシュレッターした紙（色つきの紙は除きます）
- たらいやバケツ
- 水（早く軟らかくしたい時は、大人が湯で軟らかくすることもできます）
- 袋に入った洗濯糊（100円位、ドラッグストアにあります）
- ビニール袋（袋の中で色づけすると、子どもが交代で混ぜられます）
- 使い捨て手袋
- 絵の具
- 作品にするときはスチレンボード（発泡スチロール材のボード）などを適当な大きさに切った物
- 木工用ボンド

作り方

- 1 たらいにシュレッターした紙を入れ水にひたします。粘土作りの前日にしておくと早く紙が軟らかくなります。ドロドロになるまでもんだり、混ぜたりして感触を楽しみます。
- 2 軟らかくなった紙を手、金網、ざる等ですくい、絞って水気を切ります。
- 3 水を捨てたたらいに、しぼった紙を入れ、洗濯糊を入れます。グニュグニュから耳たぶくらいの柔らかさになるまで適当に糊を足し入れ混ぜます。粘土の元ができあがり。
- 4 バケツやビニール袋に粘土の元を分けて、絵の具を入れ、粘土に色づけをします。（色の濃さは絵の具の量で加減してください）
- 5 スチレンボードなどに下絵を描き、その上に木工ボンドをのばして、シュレッター粘土を載せたり広げたりして楽しめます。
- 6 何日か、乾かします。（たくさん重ねるほど、乾くのには時間はかかります）

※共同作品にするなら、同じ大きさにスチレンボードを切っておくとまとめやすいです。

※飾り磁石等小物は、粘土板等の上で作り、ダンボールの上に移動させて乾かします。

（ビーズ等を埋め込んで飾って乾かし、乾いたら裏にボンドで磁石を貼ります）

※ままごと遊びに使用できる、おにぎりやパンや果物等も作れます。

※要するに既製の紙粘土で楽しめることが同じようにできます。

♪是非ともチャレンジしてコツをつかんでください。失敗は成功のもとです。
まして材料費が安いです。使い方で1歳児から大人まで十分アートできます。

（つつい あけみ）



アートの可能性は無限大

—シュレッター粘土が結び付けたものとは

梅岡慶子、田中美咲（おおぎ認定こども園）



子ども同士のつながり、濃くなあれ！

当時（2017年）、1歳児は言葉が増えてきており、「か～し～て～」
「か～わって～」「あとで～」「い～い～よ～」とやりとりを楽しむ姿が
見られていました。夢中になって遊び込むことで、自然と言葉がたくさん
出てくるように、また子ども同士のつながりが濃くなり、やりとりが増える
ようにとの願いから、“お店屋さんごっこをするのはどうだろう”と考えまし
た。そこで、子どもたちにとって身近で大好きなおにぎり（給食のおかわりで出てくる「きなこおにぎり」）を作
り、お店屋さんごっこをして遊んでみることにしました。

1歳児クラスで、おにぎりを何でつくろうかと考えたときに、秋の文化祭展示に向け、4、5歳児が作った
シュレッター粘土を元にした作品作りのことを思い出しました。



秘密の紙に無我夢中!! —4、5歳児の様子



4、5歳児がシュレッター粘土と出会ったのは2017年の夏のことで
す。「アートの日」の先生として来て下さった亀井先生の手には大きな
黒い袋。子どもたちは「なに、なに～!?」と興味津々で、その黒い袋に
視線が集まります。亀井先生から「秘密を書いた紙が入っています。」
と教えてもらい覗いてみるとそこにはシュレッターされた紙が盛り沢山!!
「園長先生の部屋にあるやつー」「ほれ知っとるよ～」との言葉が飛
び交いながらも、目を輝かせる子どもたち。さっそくたらいに移し替える
と、「キャー」という歓喜の声が部屋中に響き渡り、たらいに飛び込みそ
うな勢いで「秘密を書いた紙」に手を伸ばしていました。素材に触れた
子どもたちは「きもちい～」「ラーメンみたいやなあ～」「ふわふわじゃ～」
「もやしにもみえるなあ～」と思ったことを素直につぶやき、「秘密を書
いた紙」が飛び出るのも気にせず無我夢中で感触を楽しみました。それから水を入れて絞り、先程とは違う
紙の質を自分たちの手で感じ始めた子どもたちは、机の周りに並べ「せろろみたいになった」「もっとつなげ
て～」とお友だちと楽しんだのです。そして最後に絵の具とのりを「うわぁ～つめたい」「もっとえのぐちょうだ
い」「きれいにまざってきたなあ～」とお友だちと言葉を交わしながら混ぜ、完成したシュレッター粘土に自由
に触れ、子どもたちの世界の中で自然と様々な遊びが生まれていきました。その日はテレビの取材が来てお
りいつもと違う環境でしたが、夢中になって遊び込んでいる子どもたちには関係のないことのようなのでした。



シュレッター粘土って何だろう??

1歳児がシュレッター粘土と出会うきっかけになったのはその年の秋のことです。4、5歳児が作ったシュレッター粘土を分けてもらい、初めてそれを手にすることになりました。元々汚れるのが苦手な子が数名おり、「シュレッター粘土は大丈夫かなあ?」と心配していた保育者。しかし、そのような心配をよそに子どもたちは「みてー」「これあお〜」「あか〜」とつぶやきながらシュレッター粘土に手を伸ばし、服や手が汚れるのも気にせず、「もりもり〜」と言いながら触れ親しんだのです。このとき、子どもたちは自由に表現する楽しさを感じているように思えました。

その楽しかった経験をもう一度…と思い、おにぎりをシュレッター粘土で作ろう!ということになったのです。

5歳児さんは先生ーシュレッター粘土ってどう作る?

シュレッター粘土づくりの経験のある5歳児に“先生役”として来てもらい、手順や約束事、大事なことを伝えてもらいました。1歳児にわかりやすいように「大事なことは食べないこと」と教えてくれ、作業に入る前には袖まくりのお手伝いもしてくれました。その憧れの5歳児の方をしっかりと見て話を聞いていた1歳児の子どもたちは、保育者と一緒に、教えてくれた手順を確認していくと、「みず」「ぎゅーってする」「そのしろい(のり)いれる」と自分たちから言葉を発してくれました。水を入れるのも、力いっぱい絞るのも、水を捨てるのも、積極的に参加する子どもたち。水を入れると「つめたーい」「きもちーな」「ぎゅー」と言いながら絞り、のりを入れると「べちゃべちゃする」「くっついたなー」と子どもたち自身が感じたことがそのまま言葉となって出てきたのです。できあがったシュレッター粘土のおにぎりを並べ、「できたなあ〜」と嬉しそうに眺める子どもたちの目はキラキラしていました。



子どもたちはなりきり上手!! ～おにぎり屋さん

自分たちで作ったシュレッター粘土のおにぎりを机に並べると、さっそくお友だちや保育者に「どうぞー」と言って渡したり、おにぎりを食べる真似っこをしたりと、すぐにお店屋さんごっこをはじめた子どもたち。そんな1歳児たちを見ていると、お店屋さんごっこをもっと広げたくなり、看板やチケットを作る保育者。「おにぎりや



さんですよ〜」「いらっしゃいませ〜」「これ、ください」と少しずつやりとりが始まり、子どもたちにのせられ、保育者も一緒にお店屋さんごっこを楽しみました。この子どもたちのやりとりを保護者の方に見てもらいたい、親子で遊ぶ楽しさを実感してもらいたいと思い、参観日につなげることにしました。

参観日では、嬉しそうに「ママきて〜」「こっちおいで〜」と呼び込む子どもたち。照れくさそうにしている保護者でしたが、屈託のない笑顔で「いらっしゃい〜」「まいどあり〜」「またきてね」と楽しむ子どもの姿を見て、お店に足を運んでくれはじめました。子どもたちには大人をも遊びの世界に呼び込む力があると感じました。親子でお店屋さんごっこを楽しんでいる、そこにはほっこりした空間が広がっていました。

その日の給食では「きなこおにぎり」が登場!おいしそうにパクパク食べる子どもの姿を見て、後日お家で実際に作って食べたと教えてくれ、家庭へのつながりを感じました。



一緒に遊ぼう! 0歳児さん

参観日での経験を機に自信をつけた子どもたちは、自分たちより低年齢児の0歳児をお店屋さん呼び込み始めました。0歳児もシュレツダー粘土のおにぎりを見て、思わず手に取ったり、口に入れそうになったり、お店屋さんに入りたがったり、嬉しそうにする表情がたくさん見られました。手をつないでお店に買いに行ったり、食べそうになっていると「ダメだよ〜」と声を掛けたり、遊び方を教えてあげる1歳児は、0歳児にとったらお兄ちゃんお姉ちゃんなのかもしれません。その経験が更に自信へとつながりました。

やったあ!おにぎり作り 一本物の体験(食育)

本物のおにぎりを作りたいと思い、田植え➡収穫➡おにぎりパーティーを経験した5歳児に相談しました。5歳児は、1歳児にとってシュレツダー粘土づくりの先生でしたが、今度はおにぎり作りの先生になってもらいました。シュレツダー粘土のときと同じように指先を使ってしっかりと握ります。「あつあつ〜」「ぎゅってするんよな〜」と作りながら、子どもたちの感情が言葉につながりました。子どもたちの手から生まれたおにぎりを大好きなきなこおにぎりに変身させるよう、きなこが入ったバットにおにぎりを入れました。「あ〜おちる」「ころころしよる〜」など落ちないようにお友だちと協力して転がし、「きなこ、ついたー」と変身していく様子に目をキラキラ輝かせました。出来上がったきなこおにぎりを口に入れてにっこり。満面の笑み、満足そうな顔を見せてくれました。

おにぎりの先生である5歳児に、作ったきなおにぎりをおすそわけしました。「ま、おいしいな」と照れながらも「じょうず～」と言って食べてくれました。5歳児が声を掛けてくれ、少し得意気だったり照れくさそうだったり、様々ではありますがどの子どもとてもよい表情をしていました。今回のことでまた、異年齢間に濃いつながりができたのです。

子どもたちは先生！一素直な子どもたちが教えてくれたこと

子どもたちの楽しい、嬉しい、やりたいという気持ちを見逃さず、大切にしてきたからこそつながったシュレッター粘土でのおにぎり作り。子どもたちの身近な物を遊びに取り入れること、そして子どもたちの手で作り上げたものを取り入れることで、自分たちの思いがぎゅっと込められ、より遊びに夢中になれたのではないのでしょうか。「面白そう」「やってみたい」という気持ちが、子どもたちからどんどん溢れ出してくるのが伝わってきました。実際に触れて心でも感じ、夢中になって遊び込む中で、自然と言葉が溢れるように出てきたように思います。シュレッター粘土を通して自然とお友だちを意識して、自分1人の世界から抜け出し、同じ目的に向かって歩みを進めていった子どもたち。アートというものが孤立することなく、日々の生活、遊び、食育といった本物の体験へとつなげて展開したことで、身構えることなく素直に楽しめるようになったと思います。1歳児のときのアートの経験を経て、自由にありのままの自分を表現するようになった子どもたちは今、好奇心旺盛で自発的に遊びを生み出し、遊びを展開する、持続して遊び込む力があるように感じています。

「アート」と聞くと乳児には難しく、年長児が楽しむもののように思っていました。難しく考えず素材を楽しめばよいのではないのでしょうか。「アート」という世界には固定観念は必要なく、間違いありません。そして楽しみ方は無限大です。「アート」には、子どもたちと同じように無限の可能性があり、不思議な魔法のようにも思えます。このように感じることはできたのは、紛れもなく子どもたちのおかげです。保育者にとって子どもたちは先生なのかもしれません。シュレッター粘土という一つのきっかけから、人と人がつながり、心と心を結び付けたのです。

(うめおか けいこ、たなか みさき)



シャボン玉アート

たっぷりシャボン玉で遊んだ後、シャボン玉の絵を描く活動です。始めにシャボン玉の形や色、飛んでいくようすをよく見るように伝えておきます。観察して分かったことや発見したことなどを子どもたちと共有します。子どもたちは、遊びながらシャボン玉の大きさで飛び方が違うことに気づいたり、面白い形やきれいな色を見つけたりして、発見したことをいくつも教えてくれます。そうして、シャボン玉を描くときには、「シャボン玉＝丸い形」という概念的な表現ではなく、とても自由な子どもの世界がたくさん絵の中に現れてきます。



このプログラムでは、絵の具にシャボン玉液の残りや食器用洗剤を少し入れてみましょう。そうすることで透明ビニールなどに描くことができるようになります。屋外のフェンスや遊具に貼ったビニールに描くことで、腕をいっぱい伸ばして描いたり、ビニールの両側から友だちと向き合って描いたり、いつもとは違ったお絵かきを楽しむことができます。遊びと造形活動がつながることで、普段、絵を描くことが苦手だと感じている子も気楽にお絵かきができるかもしれません。また、異年齢の活動も工夫次第で一緒に楽しむことができると思います。

-
- 年齢 3～5歳児
 - 時間 60分ぐらい(シャボン玉遊び15～20分程度、お絵かき30～40分程度、まとめ)
 - 用意するもの シャボン玉をつかって遊ぶ道具一式(シャボン玉液、ストローなど)、絵を描く支持体(ゴミ袋を切り開いたものや農業用のビニールシート、透明傘など)、養生テープ、水性絵の具、食器用洗剤、筆、絵の具入(カップや牛乳パックなど)*筆と絵の具の入れは一人1セット
-

シャボン玉であそぶ

シャボン玉を飛ばして遊ぶ前に「シャボン玉の色や形などをよく見てね、後で教えてね」と伝えておきます。

2

[レシピ] シャボン玉アート

「雪だるまみたいなシャボン玉ができたよ」「大きいシャボン玉をつくろうとしたら、ながーく伸びたよ」「シャボン玉に、保育所が見えたよ」「黄色とかむらさきとかいっぱい色があったよ」「お空に飛んで行って見えなくなった」など、たくさんの発見があります。「シャボン玉の影を見つけた」といって、ずっと地面を見ている子もいました。シャボン玉の形や動きを身体で表現してみても楽しいでしょう。



シャボン玉を描く

いろいろな形や色のシャボン玉を遊具やフェンスに貼った透明のシートに自由に描いてよいことを伝えます。はじめは、丸い形のシャボン玉を描いていても、段々いろんなものを描き出します。イメージがわいてきて描きなくなったらどんどん描けばいいのです。「シャボン玉を描かなくちゃダメでしょ」と言う必要はありません。のびのびと、どんどん描きたくなる感覚を大切にしたいですね。



シャボン玉をしている自分や友達、太陽や花や虫、家や線路や乗り物など子どもの世界がいっぱい絵の中に現れてくるでしょう。

絵の具入れ(牛乳パックなど)と筆は一人1セット用意します。色は、赤、青、黄、緑があれば十分だと思います。はじめに好きな色を選んで描き始めますが、途中で違う色を使いたくなったら友達と交換してよいことにします。すると、「かえっこして」「いいよ」「この色、まだ使いたいからあとで」と友だちとのコミュニケーションが自然に生まれます。

みんなで描いた絵を鑑賞

発見したことや面白かったことなどを話し合い、活動の振り返りをします。

作品は長持ちしないので造形あそびとして捉え、写真などで記録しておくことをお勧めします。

2

[レシピ] シャボン玉アート

やってみようと思う先生へ

●洗剤に含まれる界面活性剤の働きで、水性絵の具だけでは書いて描けないビニールにも描くことができます。100ccぐらいの絵の具なら洗剤を数滴加えて、ビニールに描いてみてください。ピタッと気持ちよく引っ付く感じになったら準備OKです。



●透明のビニールに描くとまわりの風景が透けて見えるので白い紙に描くのととは違った楽しさがあります。カラーのビニール袋(黒、赤、青など)に描くのも面白いです。

●絵の具を濃いに溶くと色や形がはっきりします。薄く溶くと透明感が出ますが描くときに垂れやすくなります。それを失敗と思わず、絵の具が垂れていくようすを子どもたちと一緒に楽しむのもいいと思います。

●異年齢の子どもたちと活動するのもお勧めです。一緒にシャボン玉で遊んだ後、お絵かきをする場所を年齢ごと、クラスごとに分けておくと活動しやすいですし、クラスごとの共同制作にもなるでしょう。

発展

二度楽しむ「ビニール傘の絵」

ビニールに簡単に絵の具で描けることを利用して、いろいろなものに絵を描いてみましょう。たとえば傘。お気に入りの絵を描けば自分だけの傘ができます。しかし、絵の具の耐久性は低いので、しばらく飾った後は、雨の日にその傘をさしてみんなでお散歩することをお勧めします。シャボン玉液で描いた絵が、泡立ちながら雨と一緒に流れていくのを楽しみましょう。



でも、せっかく描いた自分の絵がなくなるのは残念です。今度はビニール傘に、油性マジックやビニール専用の絵の具などで絵を描いてみましょう。耐久性が上がり、生活の中で実際に使うことができます。雨の日が楽しみになるかもしれませんね。





素材あそびって たのしい!!

井上佳子 (徳島市立北井上認定こども園 副園長)

足型づくり

壁面環境*や毎月の制作で残った画用紙から好きな色を選び、上靴を置いて足型を作りました。「こんなにおっきい?」と自分の足の大きさを実感していました。それでも残った色画用紙を保育者が四角に切っていると「なんしょん(何してる?)」「小さい四角の画用紙にしたら使いやすいだろ」「そっかー」。このやりとりの後、子どもたちは使った残りの画用紙を四角く切ったり、「これはもうつかえん(小さすぎて)なあ」とゴミ箱に捨てたりしていました。



出前授業

2017年6月の出前授業は亀井先生と友井先生が来所しての出前授業。元永定正さんの絵を見て「何に見えるかな?」との問いかけに「うさぎ」「ひこうき」「ハンバーガー」「いぬ」「うさぎ」「くるま」「ひっくりかえてみたら とりにみえる!」「ここにな すうじかいとる」…と子どもたち。

「なんか ちがでよるようにも みえる。」「えーっみえへんてえ」という子どもの声に、「アートには正解も間違いもないよ。みんなが感じたことはみんな正解!」と友井先生がおっしゃってからは、「なんかな けんがささってなあ」「ねっころがってみたら またちがうよ」…。床にねそべてみたり、股の下からのぞき見したりと友達の話聞きながら、いろいろな視点を試しました。

「絵を観て思ったことを描いてみよう」と友井先生。「うさぎが さんぼしようどこ」「ぼくがじどうしゃ のつとるところ」「みたまんまかく」「おっきいくちあけて ハンバーガーたべよる」子どもたちのイメージがどんどん膨らんでいきました。また、「なんかいっぱい いろあるけんうれしい!」「わたしのこんなに(色が)ない」「このいろすき!」「このいろが いいとおもう」など、美術館から持って来てくださったサインペンの色の多さに驚きと感嘆の声をあげていました。同じピンクでも自分のイメージにあうピンクを探すことができるのは美術館の出前授業ならではのようです。

この絵はその後、美術館の先生方の手により一人一人の個性が詰まった絵本に生まれ変わり、「美術×本＝楽しさと多様性」展(2017年)で展示していただき、10月に美術館へ園外保育で観に行きました。



出前授業はその後、「鳥獣戯画などの作品を観てチームでお話を創る」「色んな木の絵をみてみよう」(屏風の教材も持ってきてくださいました)、「木がいっぱい」の制作と合計5回来ていただきました。



「せいさくこーなー ただいませいさくちゅう」

その日のうちに作りたいものを完成させ家に持ち帰る子、毎日少しずつ作り続ける子、作ったもので友達と遊ぶ子と様々なのですが、素材コーナーの机の上やロッカーの上など保育室が作品で溢れかえっていました。

ある日、とある職員から「見学に外部の人が来たら(作品とは思わないので片付いていないことに)びっくりすると思うよ」と言われました。作品は週末に一度持ち帰る約束ですが、それまではどうするか?(作っている)とちゅうやもん」「まだするしー」。そこで考え付いたのが「なんかに かいて はっ(貼っ)とくんは?」「そしたら わかるかなあ」「なんてかく?」「せいさくこーなー」「(棚を指さして)ここちゅうけど」「つくんりょーやつ(作っている途中の)おいてあるし」。子どもたちの瞳が保育者に集まりました。「途中を知らせるには制作中って言葉があるけど」と言うと、「それぞれ!」「せいさくちゅう」と画用紙に書き、素材コーナーと棚の横の壁に貼りました。「これでいけるよな!」と、アドバイスをくれた職員が保育室に来た時に見せていました。

後日談。子どもたちは数日間、作品を置く場所を意識して考えていました。



夏の遊び

4歳児と一緒にLEGOブロックでレーシングカーを作り保育室で走らせて遊んでいました。車のスピードが速くて何度も正面衝突をして大破。「どうしたらいいと思う?」の問いかけに、「(走らす)ばしょつくる?」「ほうやな!!」とレース場作りが始まりました。牛乳パックや空き箱でコースを作り、「ピカピカひかんりよところあるよなあ」とプリンカップでサーチライトの塔を作成しました。「ここもっという」「ここテープでとめて」「こっちとこっちつなげよう」と声をかけながら手分けして完成!!「やったあ!はしらせてみよう」「○○ちゃんよんでこよう」といつも一緒に遊んでいる4歳児を誘いに行き、さっそく車を走らせていました。

だんだんとコースが壊れてくると、その度に修理をして遊ぶことを繰り返し、最後には基地になって好きな遊びを持ち込む場所になりました。



食べ物作り

阿波踊りや花火大会など色々な夏祭りを体験したので屋台の食べ物作りが盛んになりました。スズランテープと割り箸やストローを使って綿あめやりんごあめを作り、「いらっしやいませー」と別の遊びをしている子たちに声を掛けると「なにうんりょん?」「わたあめ」。「みどりのがいる」「はい どーぞ」。こんなやりとりの後、「ぼくやもなんか つくるわ」と、トレットペーパーと空き容器で作ったかき氷、広告紙と色画用紙で作って舟皿にのせたたこ焼きを見せてくれました。



絵本の読みきかせ時に出てきた「おかしやさん」のお菓子がとても魅力的だったようで、お菓子に変わりました。スズランテープで三つ編みを作り、渦巻き状に巻いてストローを棒に見立てたペロペロキャンディー、ペットボトルの蓋を使った一口チョコ、ドーナツ、カップケーキ、マカロン等々。一人黙々と作っている子、友達と相談しながら作っている子など、制作している姿は違いますが、「おかしやさん しよっかー」「もうちょっとつくってからにする?」とお店屋さんごっこについてはみんなで相談していました。



4歳児クラスがハロウィンの仮装をすると聞き、「つくったおかし あげるわー」「たらんとおもうよ」「ほな もうちょっとつくろう」それまでお菓子作りに参加していなかった子たちも、「1こはつくるわ」「もうちょっと おねがい」「じゃあ 3こ」と5歳児全員がお菓子作り。

ハロウィンパレードの日には一人一人がポケットにたくさんお菓子をに入れて準備、「おかしをくれないと いたずらしちゃうよ!」と4歳児がいうと、「ハッピーハロウィン。おかしをどうぞ」と手渡しました。

3歳児もハロウィンパレードに参加。「おかし たりるかなあ…」。お菓子をもらえなくて悲しむ子がいないようキャンディをたくさん作る姿も見られました。

楽器作り

4歳児(ぼぶらぐみ)が運動会で使ったペットボトルのマラカスを見て、「あれほしい」と子どもたち。「ぼぶらぐみの先生に作り方教えてもらったら?」と言うと、さっそく「ペットボトルのなか なにはめたん?」「どないしてとめとん?」と質問攻め。「見本1個持っていく?ペットボトルの中身はなんでもいいよ」と保育者。「かしてくれた。みながらつくる?」「いれるもん さがしてみるわー」「(どんぐりをいれて)あんまりいいおとせんあー」。思っ

ていた音ではなかったようで、「アイロンビーズいれてみる」「なんか かたいもんいれよう」。思いついたものを入れて鳴らすのを繰り返し、お気に入りの音が出るマラカスを作っていました。

その後はティッシュペーパーの箱にお菓子の箱を貼って輪ゴムをつけたギターやバイオリン、細長い段ボールに鍵盤を描いたピアノ、ラップの芯や箱を使ったフルート、箱に丸めた画用紙を貼ったマイク、空き箱にゴムや段ボールを貼ったギロ…とたくさんの楽器が出来ました。作った楽器はお誕生会の出し物で、「山の音楽家」の歌を歌いながら披露しました。

また、楽器作りからはじまった興味がどんどん広がり、生活発表会では「がっきがでてくるおはなしがいい」と言う声と、保育者が取り組もうとしていたお話と奇しくも一致し、「いつまでも ともだち」というオペレッタをしました。本物の楽器を使った合奏では、自分が演奏するだけではなく友達と「息を合わす」難しさとしを楽しみを経験しながら奏でました。



「木がいっぱい」

年間を通して「ネイチャーゲームの日」に木、セミ、落ち葉、風、木の実、土等いろいろな自然に触れる機会があり、tuperatupera(ツペラツペラ)さんの絵本『木がずらり』をモチーフにして、大きな段ボールに「こんな木があったらいいな」「こんな木にしたい!」と共同制作をしました。



保育の中で普段は一緒に活動しているチームではなく、ジャンケンで5つのチームに分かれ、まずは設計図作り。「ここにはな さいとる」「ここにはカブトムシ」「ゆきふらそう」「さんかくとまるのきに しょう」「おっきなき(枝)がにほんある」「いろんないろのきにしょう」。友だちと話しながらかくことでイメージが具体化されチームで共有できました。できた設計図をホワイトボードに貼って他のチームにプレゼンテーションしました。木を作る場所はチームの代表者によるくじ引きで決めました。チーム決めも場所決めも全て偶然から何か生まれればいいと思いやってみました。



その後は設計図に合わせて必要な素材集め。イメージに合う素材を集めていきます。クッション材、布、パッキン、毛糸、空き箱、包装紙、セロハンテープの芯、保育所に届いたトイレトペーパーを包んでいた大

きな茶色の紙、果物を包んであるネット…。この活動のために、普段子どもたちが素材遊びをしているのとは別に材料を確保してありました。



「ここに まるはっていこう」「ここは ピンクのぬのにしよう」「これ(リングの入っていたパッキング) きって ○にして はろう」「(3連の空気の入ったクッション材を)さんかくにして はろう。ゆきになる」「かめさん(亀井先生) さくらのはな これできて つくって」「ともちゃん(保育者) ここにこれはって」「よしこちゃん(保育者) ここに ボンドぬって」「みくちゃん(保育者)ここ(動かないように)もって」。制作するなかで、自分たちでは難しい部分は保育者にして欲しいことを具体的に伝え、設計図の通り、木を完成させました。



「まるいボールみたいにしたいんやけど?」等、保育者にたずねることもありましたが、「○○チーム見てきたら?アイデア浮かぶかもよ」と答えると、「これに こうまいたらいけるんやなあ。ありがとう。ほな これ(空気の入ったクッション材)さんかくにして(折って) けいと まいてくわ」。友

だちのアイデアに感心し、発展させていく姿が見られました。

この制作は、年が変わった1月に近代美術館で開かれた「フリースペースチャレンジ徳島芸術祭2018」に出品することができました。お家の方と一緒に美術館に見に行った子もあり、「なんかほいくしょより(保育所で観るより)かっこよかった」「ほいくしょよりきれかった!」と、スポットライトの下で観る作品の印象の違いを感じていました。



高木夏奈子先生と

千葉の大学の先生、高木夏奈子先生が出前授業に来てくれました。まずは音楽を聴きながら歩きます。ゆっくり、ちょっと早く、よりゆっくり、とても早く…。次にタクト代わりの棒を持って思い思いに指揮をします。

体を使って表現した後は、「かめさん(亀井先生)がもってきてくれるマーカー いつもいろいろいっぱいやけん うれしい!」と、大きな長い紙に思

い思いのマーカーを持って曲を聴きながら線を描きました。柔らかい線、角張った線、波線、直線…。

描いた線に次は切り抜いた模様を貼っていきました。亀井先生が持ってきてくださった美術館の古いチラシは多種多様。その中から自分のイメージに合う模様や色を探し、足りない色は色紙を使って。

できた図形楽譜を並べてみんなで見せ合いっこ。「これかっこいいなー」「どうぶついっぱい どうぶつ えんのおんがくかいみたい」(実写の動物をたくさん切り取って貼っていました)。「おはながいっぱいかわいー」「このいろすき」。誰の作品かという先入観なく素直な感覚で評価していく子どもの姿に成長を感じました。



お店屋さんごっこ

内町児童館が11月に「どんぐりマーケット」を開催してくれたこと、毎年5歳児がお店屋さんを開いてくれたことがきっかけとなり、「おみせやさんしてみんなよぼう!」と準備が始まったのは1月。開催時期はあえて決めずに自由遊びの時間を使って品物作りをしていきました。「なににつくる?」「おかしやさんとケーキやさん」「おもちゃもいる?」「たべものは?」「ゲームもいいなあ」「たのしいとおもう」。お店のイメージはどんどんふくらんでいきました。



自由遊びの時間のみの準備だったので制作する子は限られ、なかなか品物が増えていきません。2月に入り、「お店屋さんごっこするには品物が足りんなあ?」「うん、どんぐりマーケットもっといっぱいあった」「みんながきたらぜったいにたりん!」。「どうする?修了式までに間に合うかなあ?(お店)」。ふっと保育者が漏らした言葉に、「ぜったいにおみせやさんごっこしたい!」「みんなでもっとつくるわ!」「なあなあ、しなものたりんて、おみせひらけれんて」「うわー、ほな ばくおもちゃつくるわ。〇〇くんいっしょにしよう」「うん」「〇〇ちゃんきてー。これ。(一緒に作って)」。友だちに声をかけ品物作りが急ピッチで進みました。

何かあったとき、自然と友だちに声をかけ協力していく姿は保育者も「凄いな」と感じる場面です。

制作が苦手な子は、「なにしたらいいかなあ」と友だちに聞いて、「くだものやさんは?」「がようしでつくったらいいよ!」「あつ、それいいなあ」とアイデアをもらって果物作り。「これにいれたらもっと(果物)ばいよ」と果物ネットに入れたり、ケースに入れたりと工夫していました。

折り紙を折って作ったロケットと発射台のおもちゃ、ペープサート。一人で黙々と職人のようにつくったお寿司(制作していた子は将来の夢がお寿司屋さんです)、材料を相談し合いながら作っていたうどんやおそばラーメン、やきそばなどの食べ物。周りの囲いや釣竿も手作りした魚釣りゲーム。夏の遊びから続いた

発展的な事例

お菓子屋さん。

3月13日に、お店屋さんごっこができました。「ありがとうっていった」「ちっちゃいこがニコニコしてかってくれた」「ぜんぶ、ぜんぶうれたなあ」。終わった後の達成感と満足感に満ちた笑顔がまた一つ成長した子どもを感じました。

おわりに

美術館での鑑賞・出前授業の「アートの日」の体験で、「アートには正解も間違いもない。感じたことはみんな正解!」と認められたこと、ネイチャーゲームで「負けた、悔しい、でも次はがんばるぞ!」と気持ちを切り替え次に頑張る心持ちを教えてもらったこと…。制作遊びが好きな子どもたちばかりではなかったさくらぐみの子どもたちですが、いろいろな経験を通して、作ることは苦手でも友達が作っているものにアイデアをだしたり、「おうちにあったけん、もってきた。つかってよー」と、空き箱などの素材を持って来たりして、いっしょに作っていく姿が見られました。

「ほいくしょに このはこもっていくけん おいといてよ」とお家の方に空き箱を取り置いてもらう子など、「誰が(素材を)持ってきたか なぞなぞにする?」と職員が言うほど、毎日のように素材が集まりました。子どもたちの楽しそうに遊ぶ姿や保育所で楽しかったことを家に帰って話す姿があったからだと思います。

保育者として素材遊びで心掛けたことは、「色んな素材をたくさん用意する」「制作で残った用紙は四角に切って『小さな画用紙』に作り変えて無駄にしない」。この2点でした。

様々な経験といろいろな素材が子どもの発想を引き出してくれること、物を大切にすること、そして何より友だちと楽しむこと協力することなど、大切なことを改めて実感した1年でした。

(いのうえ よしこ)

*壁面環境 保育者が、子どもの作品を取り入れたり、子どもと一緒に作ったりして壁面を飾ったもの。



心と心が合わさったモザイクアート (幼稚園・保育所共同作品)

—北井上認定こども園開園に向けて

近藤恵子 (徳島市立北井上認定こども園 園長)



2018年4月、北井上幼稚園、北井上保育所、芝原保育所の3施設が統合して、北井上認定こども園が開園しました。保育所、幼稚園の子どもたちが共に生活をはじめるとあたり、2017年には、一緒に遊んだり、行事を行ったりと様々な交流を図ってきました。

北井上芝原地区にはむつみ祭という地域の文化祭があり、例年3施設がそれぞれ、子どもの制作や絵などの作品を展示していました。2017年度は、翌年統合され1つの施設になるということで、何か共同で作品が出来ないものかとの思いがありましたが、なかなか良いアイデアが浮かばず、思案していました。その様なときに、徳島県立近代美術館の亀井先生とお話をする機会があり、裏面に両面テープが張ってある発砲スチロール材(スチレンボード)を細長く切り、マジックで色を塗り、色々な形に切り貼っていくモザイクアートがあるとのヒントをいただきました。離れていた3施設がそれぞれに作品を作り、それを集めることで1つの大きな作品にすることができるという、今の私たちにピッタリのアートを見つけることができたのです。「一人一人の個性あふれる作品が集まり、大きな1つの作品となる」「個でもあり、集団でもある」。まさしく思い描いていた「気持ち・想いを形に表せる」取り組みとなりました。

4、5歳児がマジックで塗った発砲スチロール材を、5歳児がハサミで切り、0歳児から5歳児の子どもたちが年齢に応じた楽しみ方でモザイク画を作っていました。4、5歳児は花や動物、ロケットなど心に思い描いたものを形に表現し、乳児、年少児は好きな形や色を好きな数だけ思う存分、思った場所に貼って、子どもたち全員が夢中になって楽しんでいました。出来上がった一人一人の作品には、子どもたちの思いが詰まっています。それを1つの大きな画面に貼り1枚の大きな芸術作品が出来あがりました。個があって全体があるという表現の作品に出会えたことが、何より私たちの現状や気持ちをそのままに表してくれています。

新しくはじまったばかりの認定こども園は、このモザイクのように一人一人を大切に、共に生活をする仲間集団でありたいと思っています。

(こんどう けいこ)



自然・環境・場所を生かした表現方法

「素材」をモノだけでなく自然や環境、場所に広げると、
アート活動は机上や部屋での活動から外へ飛び出し、
子どもたちのさらなる自由な表現へとつながります。
ここでは、現代アートを研究している学芸員が
子どもたちの遊びとアートの視点を重ね合わせて実践した
「石ころアート」と保育者が子どもたちの遊びのなかに
豊かな表現活動を見出したレポート「魔法の水絵の具」を掲載しました。
子どもたちが何を感じ、何を発見していったかを想像しながらご覧ください。

石ころアート



夏の石ころアート 佐那河内村立佐那河内保育所

2015年の7月末の暑い日に、しんちゃん先生こと友井伸一学芸員（徳島県立近代美術館）が佐那河内保育所に出前授業に行きました。佐那河内保育所の横にはきれいな水が流れる川があり、夏になると子どもたちは、そこで川遊びをしています。「石ころアート」と名付けた活動をするためほし組（5歳児）の子どもたちと水着に着替えて園瀬川の河原へ降りていきました。豊かな自然のなかで生活している子どもたちには、きれいな水もそこに魚がいることも当たり前です。そのような子どもたちに水はどこから流れてくるのかと問いかけます。首をかしげて考える子、「あっちから!」と言って上流を指す子、「山から」と答える子もいます。

葉っぱを上から水面に落とします。ひらひら舞いながら落ちて流れて行くようすを観察したあとは、葉っぱになってくるくるまわりながら水の中に入り上流から下流へ泳ぎます。

今度はお気に入りの小石を見つけにいきます。そして、友だちの石と石をくっつけて、なんとなくぴたっと合うところを探して水中に並べていきます。どんな形になるかはわかりません。一個、また一個とぴたっと合うところを見つけては並べたり積んでいったりしているうちに少しずつ大きくなっていきます。水の流れを身体で感じながら想像を巡らせるのは、初めての経験であり、石ころの元の形（大きな石）をつくっていく行為は子どもたちにとって新鮮な遊びとなったのではないのでしょうか。これまで、気にもとめなかった小石は、もうただの小石ではありません。自分と自然のつながりを発見する機会となったでしょう。

アート活動を通して、普段見慣れた場所や日常生活のなかから魅力的な世界を発見したり新しい出会いを経験したりしながら、生活を豊かに生きる術を身につけていってほしいと考えています。

冬の石ころアート 徳島市立八万保育所

2014年11月、冬の寒い日に、美術館の近くを流れる園瀬川に八万保育所の子どもたち（4、5歳児）が集まりました。しんちゃん先生は、子どもたちの前で石ころを見せながら「この石はどこから来たのだろうか?」と問いかけました。さらに「元はどんな形をしていたのだろうか」と子どもたちに尋ねました。子



もたちは、一生懸命考え、川の上流を指さす子もいれば、山にあったという子もありました。山にあるような大きな岩が川に落ちて、ゴロゴロと川を流れていく中で、割れて小さくなるようすを子どもたちと想像しながら、今度は子どもたちが小さな石になってみました。小さく、丸くなった子どもたちは、次は、友だちと引っ付いて大きな石になってみました。みんなで引っ付くと温かくてだんだん楽しくなってきたようです。どんどん大きな岩になって遊びました。身体が温まったころ、今度は河原に石を拾いに行きました。お気に入りの石を探して一人1個を持って集まりました。見せ合いっこをした後、石と石を引っ付けてみて、何となくぴったりすると思うところを探して並べていきます。どんな形になるかわからないけれど、お気に入りの石を友達の石に引っ付けて並べて大きな石をつくりました。みんなで並べてつくった大きな石を持って帰ることはできません。一人一個だけ保育所に持って帰っていいことにしました。子どもたちは石をしっかりと握りしめて保育所に持って帰りました。

後日、4歳児の子どもたちは、石に絵の具を塗って遊んだそうです。5歳児の子どもたちは、段ボールに石と水の流れを描いて、石を置く敷物にしたそうです。

石ころどうしがぴったり合う面を探するとき、どの子もとても真剣なようすで、横に置いたり上に置いたりして実際にいろいろと確かめていて、石と石がピタッとあったところを見つけた時のうれしそうな表情が印象的でした。友達とひっついた時の温かさ、手の感覚、石の冷たさ、川の流れる音、水や木々のにおいなどを感じながら、ここでも自分と自然のつながりを発見することができたのではないのでしょうか。

記: 亀井幸子 (徳島県立近代美術館)



魔法の水絵の具

一大地(園庭)はキャンバス

岸上 学 (おおぎ認定こども園)

「よーし、絵を描こう!!」と思い立った時、私たちはどんな素材を思い浮かべるでしょうか??
一般的には、まず、「白い画用紙を用意して…」 「マジック、マーカー、クレヨン、絵の具などを用意して…」と考
えがちです。

もちろん、間違いではありません。しかし、ここで紹介したいのは、子どもたちの、自由で柔軟な「発想」であ
り、「視点」です。「雨(雨水)」を使って絵を描き、描くものを「園庭(大地)」にしたのです。

前日、クラスで手形スタンプ遊びをして、紅葉した葉っぱの壁面環境作りをしていました。この日(2018
年10月24日)は、朝方まで雨が降っていました。10時過ぎに園庭へ出てみましたが、水たまりがそこかしこ
にある状態でした。少しすると日も差し始め、ぽかぽかと暖かくなってきました。そして、一人の女兒が水たま
りを使って、手形スタンプができることを発見し、遊びはじめました。



「きっしー先生見て!!」

「昨日したよ」(手形スタンプ遊び)

(昨日は色がついていたが、水(雨水)でもできることを発見)

「ハート」

「うわぁ、ホンマ、ハート(^-^)」

「こうしたら、四つ葉のクローバー」

(こう言いながら、手形を二つ増やしました)

「本当だ!クローバー!」

(周りにいた友だちも、昨日のスタンプ遊びを思い出し、

一緒に遊びはじめました)

足形にチャレンジするも、どうもうまいきません。歩いているうちに水分がなくなり、足形スタンプをしたい
場所(空白地)まで雨水が持たないことに気が付き、ジャンプすると上手くいくことを発見しました。

「きっしーもやってみ!」「うん、やってみる!」「きっしーの足おっきい!」。足の大きさの違いに気付きました。
すると、その姿を見ていた、他の子も遊び始めました。そんなとき、隣でそっと見ていた一人の女兒。指を筆
に見立てて、自分の手形、足形に線を書き加え、「かたつむり」を描きました。「雨降ってたから、出てきたよ」
(経験・発想)。

これを見ていたまた違う女兒が思いついたように走り出したのです。保育教諭が、もしかしたら「筆を探し
に行ったのかも」と後を追ってみると(バレないように…)、筆を手に振り向いた女兒と目が合ってしまった。
「見つかってしまったΣ(°Д°;≡°Д°)」と固まる女兒。「いいよ」っと、「OK」を出すと、(ものすごく笑顔
で…)走ってみんなの所に戻って行きました。

筆やブラシを受け取ったみんなは、思い思いに描きはじめました。周りで見えていた友だちもその面白さにひかれ、次々に集まってきました。地面がキャンパスとなっていく瞬間でした。その素材の違いに気づき、色々な描き心地(キャンパス)を試してみる姿がありました。

テラスのギザギザタイル(滑り止め入り)→コンクリート(加工無しのそのまま)→園庭の地面(真砂土、砂)。そして、一人の女兒が、コンクリートに描いたとき「かいてもかいてもすぐ消えるー!!」と、怒りはじめました。すると、この遊びを1番最初に始めた女兒が、こう言ったのです。「○○○ちゃん、これは“みずえのぐ”なの。かいてもすぐに消えちゃうこともあるの。不思議でしょう」。



「ふーん、そっか、“魔法”みたい!!」(納得する)

女兒の怒り(不思議さやもどかしさ)は友だちの柔軟な発想で「発見」に変わりました。また、「大きなながいヘビをかきたい」という、Sくんの気持ちやイメージを共有共感し、一緒に遊び込んでいく姿が見られました。



「おおきいよ」「長いよ」「ほんとだ、長くておおきいなあ。」

Sくんがこんなにダイナミックに周りを気にせず、むしろ先頭に立ち、自ら遊んだのを初めて見ました。

「水絵の具」「不思議」「消える」「魔法」「納得」「大きく長いヘビ」「どこまで描けるのか」「共感共有」「やってみる」「子どもの気づき」「地面がキャンパス」などキーワードをたくさん発見する事が出来ました。

その次の日…。栽培用のじょうろを見つけて、何やら自分の周りに水をまき始める、Sくん。「お風呂だよ。(笑)」「もっと、お湯入れろ～」。



昨日、一緒に「ヘビ」を楽しんだ友だちが合流し、また遊びがはじまりました。今日は、25M(メートル)クラスの長〜いヘビが出来上がりました。

この日の夕方、再び、始まる「水絵の具」。朝の「ヘビ」は蒸発し、キレイに跡形もなく消えていました。午前中、製作遊びで「クリスマスの靴下」を作った体験を思い出しながら…その余った材料を持って来て飾り付け、大きな「靴下」を作り始めました。



「これで、たくさんプレゼントもらえる～。(笑)」っと。

すると、別の場所では、園庭に(キャンパス)大きな「家」を描きはじめました。「サンタさんが来てくれる～。(笑)」っと。更に、自分の自宅にあるであろう「家具」を描き足していき、お風呂、こたつ、テレビ、ソファー…など。



「車」

「できた～!!」

「よ～し、運転だ～!!」

「リビングとあらば…寝てみましょう」

「ああ～気持ちいい」(イメージを共有する)

(普段は使わない、非常階段2Fから園庭を見える)

「上から見たら、凄～い」

「初めて、ここから、お庭見た。面白い～」

それを見ていた友だちが、「なあ、なあ、俺たちも入れて～」

「何か面白そう」と、参加し遊びが繋がり、広がっていきました。



このように、アートの視点というのは、先生(大人)が、導き、教えるのではなく、子どもたちの日々の生活のなか、遊びのなかにこそあり、それを先生(大人)が感じ取り、共感し、認め、受け入れ、気づき、共に楽しむものなのではないでしょうか。

四角い白い紙の上、という先入観を一度忘れてみてはいかかでしょうか。

(きしがみ まなぶ)

素材研究からひろがる「造形」の活動

亀井幸子 (徳島県立近代美術館)

造形活動において、先に作りたいものが決まっている場合は、その制作に必要な材料や道具もおのずと決まってくるでしょう。

「材料」は、何かを作る時にその元になるもので、あるものを作るという目的がはっきりしている場合が多いと思います。例えば「動物を作る」という目的が決まっているときに使う紙粘土、絵の具は「材料」です。

「素材」は、何かの元になるもので、必ずしも具体的なものをつくる目的がはっきりしていない状態のものも含まれています。造形のための材料は、素材のなかに含まれていると考えていいでしょう。「素材」は使い方の自由度が高く、子どもたちにどのような素材と出会わせるかということは、子どもたちにどのような活動をさせたいかということを考えることにほかなりません。ここでは、「造形」の活動を「素材」に注目してみたいと思います。

1. 素材を探究するおもしろさ

レシピで紹介したシャボン玉液や洗剤、シュレッダーの紙は生活の身近にあるものです。子どもたちに出合わせる素材は、高価なものや未知のものである必要はありません。むしろ身近にあるものが造形材料になるとき、ユニークで楽しい作品が生まれることがあります。洗剤は何かを洗うときに使うものですが、レシピにある「シャボン玉アート」では洗剤に含まれている界面活性剤に注目しています。界面活性剤を、いつも使っている絵の具に少し混ぜるだけで、ビニールに絵の具を塗ることができます。本来の目的とは違う使い方していますが、台所の洗剤と造形が結びつきます。洗

剤を混ぜた絵の具に耐久性はありません。それは、作品を保存するうえでは欠点でしょう。しかし耐久性がなく、雨に濡れると少し泡立ちながら流れていくという性質と、子どもたちが「雨の日に傘をさして散歩したい」という思いを結びつけて、あえて雨の日に傘をさして絵の具が流れていく様子を観察しようという保育者の発想はとてもユニークです。子どもたちとどのような体験をしたいのかが明確です。耐久性を優先させるならば、ビニール用の絵の具やボンドを使うといいと思います。思いっきり遊ばせたいのであれば、ボンドを使う必要はないでしょう。素材は様々な姿かたちを変え、新しい価値が生まれます。「素材」について考えることは、子どもたちとの造形活動のあり方を考えることに繋がっています。

2. 素材の見方を広げる

これまで使ったことがある素材や、使ってみた素材を挙げてみるとそれぞれに特徴があることが分かります。家庭にあるもの、自然物、人工物、紙類、布類、金属、プラスチック類など多種多様ですが、比較的身近なものが多いです。「お金で買うことができるもの」と「お金では買えないもの」という分け方もあります。また、子ども自ら手に入れることができるもの（お菓子の箱を集めたり、公園で木の実や葉っぱを拾ったりする）と子ども自身では手に入れることができないもの（薬品や危険なもの、高価なもの、希少なものなど）もあります。

造形のための材料費が限られているなかで、素材としてよく使われているのが廃材と呼ばれているものでしょう。本来の目的としての役目が終

わったもののなかで、作品材料として再利用できるものはとても多いと思います。肉や魚が入ったトレー、お菓子の箱や包装紙、紐やリボン、不要になった衣類や本など数え上げればきりがありません。それらを造形の素材として使う場合、少し視点を変えてみてはどうでしょうか。もしかしたら面白い素材となるかもしれません。例えば紙粘土の材料になるシュレッダーされた紙。この紙には重要な秘密が書かれていたかもしれません。それを作品の素材にすることで、作品に別の意味合い(例えば秘密の塊)が生まれるかもしれません。

様々な大きさや形のトレーを材料として使う前に、よく観察し「どんなお肉が入っていたのかな? お魚だったのかな? どんな味だったのかな?」とイメージを広げてみるのも造形活動のウォーミングアップとなったりします。紙版画の材料として家から持ってきたお菓子の空き箱などを使うと、箱を見せ合うだけで話が盛り上がり、箱を解体する作業だけでも楽しい活動となります。家庭にある身近なお菓子の箱ですが、家庭や保育所などにあるたくさんさんの空き箱から版画の材料としてどれを使おうかと探したり選んだりするところからアート活動は始まっています。素材や材料を集めることで子どもたちの生活の中とアートがつながっていくのです。家の中でいろいろ探して迷って持ってきたお菓子などの空き箱から版画の作品をつくることで新しい価値が生まれ、大切な作品となるでしょう。

3.「素材」をひろげ 自由な表現を保障する

造形の材料の元となる「素材」を、例えば、光

や影、雲、雨などの自然現象や香りなどの目で見ることのできない、触ることのできないものに広げてみてはどうでしょう。子どもたちとの造形活動に広がりが生まれてくるのではないのでしょうか。また、美術だけでなく理科などの幅広い分野とつながりも生まれてくるかもしれません。「石ころアート」の実践でも、「石はどこから来たか」と子どもたちに問いかけています。そのとたん、見慣れた石に意味が生まれただけの石ではなくなります。実践事例「魔法の水絵の具」では、子どもたちの活動は室内を飛び出し、広い園庭で繰り広げられています。乾いた地面に水で絵を描くことができることを発見し、時間と共に消えてしまうことに疑問を持つ子どもたち。それを見守る保育者の喜びが伝わってきます。

4.子どもの興味・関心に寄り添う

このように、子どもたちは生活の中で、日々何かを発見し、探究し、そこから様々なことを感じとっています。ある出前授業のときのことです。男の子が、「まだ、飲めんなあ…」と筆を洗うバケツを大事そうに抱えてつぶやいています。「何で飲めんの?」ときくと、「まだ、苦い」と言うのです。一旦その場を離れしばらくして戻ってみると「みて、これなら僕も飲めるよ」とうれしそうです。バケツをのぞき込むと先ほどより白っぽくなっています。「コーヒーは苦いけど、お母さんがお砂糖とミルクをいっぱい入れてくれたらおいしかった。これくらい(の色)なら飲めるわ!」。紙に描くことより、どんどん色が変わっていくバケツの水に興味を抱き、そこに生活と結びついた豊かなイメージをふくらませていたのです。

5. 制作過程を知ること 子どもの表現を受け止める

お絵描きをするプログラムでは、子どもたちの自由な表現に出会いますが、子どもたちが描きたかったこと、感じていたこと、やりたかったことを完成作品だけから見いだそうとするのはとても難しいものです。ある保育所で、夏をテーマに絵を描こうと、たくさんの草花を花瓶に生けておきました。それらの花を見て描く子もいれば、大きなひまわりやカブトムシ、スイカなどを思い思いに描いている子もいました。ある男の子は、画面いっぱい色とりどりの花を描いていました。のびのびしていいなあと思って見ていたのですが、一巡して戻ってくると花が見えないくらい上から青黒い絵の具を勢よく塗っていたのです。驚いて「どうしたの?」と聞くと、「この前、すごい雨が降って風もすごかったのに、花は、倒れてなかったんじよ。」と話してくれました。彼は、風を感じながら、雨のおいを思い出しながら腕を大きく動かしまさに雨と風が吹き荒れる台風を描いているところなのでした。できあがった絵からは、花を見つけることはできません。作品の制作過程を知らず、何を描こうとしたのかを聞いていなかったら、彼の満足げな様子と色が混ざって何を描いたのかわからない絵をどう受け止めたらいいいのか困惑したでしょう。彼が描きたかったのは台風に負けず咲いている花の生命力だったのに。

6. 子どもの豊かな想像力から学ぶ

このように子どもは写真のようにある時のある場面を切り取ったような平面の世界に興味を持

ち、描きたいと思っているとは限りません。人にほめてもらえるような上手できれいな絵を描きたいと思っていないこともあるでしょう。先述のバケツを大切に抱えている子にとってのアートは画用紙の上ではなく友だちが筆を洗うたびに変化していく水だったのです。

このように、子どもにとってのアートは、机上の紙の上にだけ現れるものではありません。子どもたちは、生活や遊びの中で不思議なことや面白いことをたくさん発見し、想像力をふくらませ、様々に表現しているのではないのでしょうか。

子どもたちの活動の様子を観察し、つぶやきを聞き漏らさず、保育者が豊かな感性と想像力を働かせて、子どもたちの魅力ある表現を発見する大切さを、「魔法の水絵の具」の実践事例から気づかせてくれます。では、どうすれば、子どもたちの生活からアートを見つけることができるのでしょうか。それには、まず、子どもたちだけでなく保育者も様々な作品と向き合い、多彩なアートの世界に触れることが大切だと思います。また、ときには子どもたちと一緒に活動してみることで、アートに対する新たな視点を発見できるかもしれません。そうして、子どもたちの自由な行為を見守りながら適切な関わりを持ち、子どもの興味・関心に寄り添っていくことが大切なのではないのでしょうか。

造形活動で、一見失敗に思えることも「大丈夫だよ」とおおらかに受け止め、子どもたちの試行錯誤を重ね自ら何かを発見し何かを学び取っていく姿を見守り、支えながら子どもたちの豊かな創造性を育んでいきたいと思います。

(かめい さちこ)